

顕現後第三主日（1月22日の聖書箇所）

I 第一朗読（アモス3章1―8節）

- 1 イスラエルの人々よ
主がお前たちに告げられた言葉を聞け。
――わたしがエジプトの地から導き上った全部族に対して――
- 2 地上の全部族の中からわたしが選んだのはお前たちだけだ。
それゆえ、わたしはお前たちを
すべての罪のゆえに罰する。

- 3 打ち合わせもしないのに
二人の者が共に行くだろうか。
- 4 獲物もないのに
獅子が森の中でほえるだろうか。
獲物を捕らえもせずに
若獅子が穴の中から声をとどろかすだろうか。
- 5 餌が仕掛けられてもいないのに
鳥が地上に降りて来るだろうか。
獲物もかからないのに
罾が地面から跳ね上がるだろうか。
- 6 町で角笛が吹き鳴らされたなら
人々はおののかないだろうか。
町に災いが起こったなら
それは主がなされたことではないか。
- 7 まことに、主なる神はその定められたことを
僕なる預言者に示さずには
何事もなされない。
- 8 獅子がほえる
誰が恐れずにいられよう。
主なる神が語られる
誰が預言せずにいられようか。

II 第二朗読（コリントの信徒への手紙I 1章10―17節）

10 さて、兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの名によってあなたがたに勧告します。皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一つにし思いを一つにして、固く結び合いなさい。11 わたしの兄弟たち、実はあなたがたの間に争いがあると、クロエの家の人たちから知らされました。12 あなたがたはめいめい、「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケファに」「わたしはキリストに」などと言いつついるとのことです。13 キリストは幾つにも分けられてしまったのですか。パウロがあなたがたのために十字架につけられたのですか。あなたがたはパウロの名によって洗礼を受けたのですか。14 クリスポとガイオ以外に、あなたがたのだれにも洗礼を受けたことがなかったことを、わたしは神に感謝しています。15 だから、わたしの名によって洗礼を受けたなどと、だれも言えないはずです。16 もっとも、ステファナの家の人たちにも洗礼を受けましたが、それ以外はだれにも授けた覚えはありません。17 なぜなら、キリストがわたしを遣わされたのは、洗礼を授けるためではなく、福音を告げ知らせるためであり、しかも、キリストの十字架がむなしのものになってしまわぬように、言葉の知恵によらないで告げ知らせるためだからです。

Ⅲ福音 (マタイ4章12―23節)

12 イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。13そして、ナザレを離れ、ゼブルンとナフタリの地方にある湖畔の町カファルナウムに来て住まわれた。14それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。

15 「ゼブルンの地とナフタリの地、
湖沿いの道、ヨルダン川のかなたの地、
異邦人のガリラヤ、

16 暗闇に住む民は大きな光を見、
死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」

17 そのときから、イエスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言つて、宣べ伝え始められた。

18 イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。19イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。20二人はすぐに網を捨てて従った。21そこから進んで、別の二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父親のゼベダイと一緒に、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、彼らをお呼びになった。22この二人もすぐに、舟と父親とを残してイエスに従った。23イエスはガリラヤ中を回つて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病氣や患いをいやされた。

①今日の福音は大きく二つの段落に分けることができる。12―17節では、ガリラヤに戻ったイエスが行う宣教活動の基本は「悔い改めよ。天の国は近づいた」であったことを述べ、続く18―22節では二組の兄弟の召命が語られている。まず、マタイ12―17節が、その並行箇所となるマルコ1章14―17節と比較することから始めよう。

マタイ 12―17

12 イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。

13 そして、ナザレを離れ、ゼブルンとナフタリの地方にある湖畔の町カファルナウムに来て住まわれた。14 それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。

15 「ゼブルンの地とナフタリの地、
湖沿いの道、ヨルダン川のかなたの地、
異邦人のガリラヤ、

16 暗闇に住む民は大きな光を見、
死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」

17 そのときから、イエスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言つて、宣べ伝え始められた。

マルコ 14―15

14 ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、

神の福音を宣べ伝えて、15 「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

マタイがマルコよりも長くなったのは、字下げした13―16節が挿入されたからである。この挿入部を切り取り、12節を17節につなげると「イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。そのときから、イエスは、『悔い改めよ。天の国は近づいた』と言つて、宣べ伝え始められた」となるが、これはマルコの14―15節「ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、『時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい』と言われた」となる。用語が異なることはあるが、内容的には同じと言える。このことから推測できることは、マタイはマルコを読み、途中を裂いて、13―16節を挿入したということである。なぜマタイは書き換えたのか。イエスは暗闇に住む民が見た「大きな光」であり、死の影に住む者に射し込んだ「光」である、と見ているからであろう。イザヤの預言の成就であることをいっそう強調するために、13節を創作している

(また、マルコではこの段階では言及されていないカファルナウムをこの場所に移動させている。マタイはイザヤの預言を思い起こすことができたので、イエスについての理解をいっそう深めることができたのである。)

②次に18―22節であるが、ここでは弟子の召命が語られている。マタイとマルコが述べる召命物語にはつきりとしたパターンがみられる。それは五つの要素から成り立ち、最初の三要素はイエスの行動を描き、残りの二要素でイエスに呼ばれた者の反応が語られている。逐語的な訳を用いて五つの要素を確認したい(23節「まとめの句」であるから、ここでは除外する)。

18 さて歩きながら ガリラヤの海に沿って、

彼は見た 二人の 兄弟を、シモンを ペテロと言われる そして アンデレを 彼の兄弟を、
投げているのを 網を 海に、 なぜなら彼らがあつた 漁師たちで。

19 そして 彼は言う 彼らに、

「さあ、 私の後に、そして 私はするだろう あなたがたを 漁師たちに 人間たちの。」

20 そこで彼らは 直ちに 残して 網を、
従った 彼に。

21 そして 進んで行って そこから、

彼は見た 他の 二人の 兄弟を、ヤコブを ゼベダイの子 そして ヨハネを 彼の兄弟、
舟で 彼らの父のゼベダイと共に 整理しているのを 彼らの網を。

そして 彼は呼んだ 彼らを。

22 そこで彼らは 直ちに 残して 舟を そして 彼らの父を、
従った 彼に。

マタイ9章9節ではマタイの召命が語られるが、そこでも全く同じ五要素が述べられている。

イエスはそこをたち、通りがかりに、

マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、

「わたしに従いなさい」と言われた。

彼は立ち上がって

イエスに従った。

このような五要素を用いて召命を語るのは、出来事の経緯ではなく、召命に見られる本質を述べるためであろう。とするなら、マタイやマルコは召命の本質をどのように見たのであろうか。二番目の「イエスは見た」にあるといえよう。

③ところで、旧約聖書は召命をどのように描いているだろうか。二つの描き方がある。それはエリシヤの召命とアモスの召命である。まず、王上¹⁶章¹⁶―¹⁷節に述べられたエリシヤから見よう。

19 エリヤはそこをたち、十二軛の牛を前に行かせて畑を耕しているシャファトの子エリシヤに出会った。エリシヤは、その十二番目の牛と共にいた。エリヤはそのそばを通り過ぎるとき、自分の外套を彼に投げかけた。20 エリシヤは牛を捨てて、エリヤの後を追ひ、「わたしの父、わたしの母に別れの接吻をさせてください。それからあなたに従います」と言った。エリヤは答えた。「行って来なさい。わたしがあなたに何をしたいのか」と。

21 エリシヤはエリヤを残して帰ると、一軛の牛を取って屠り、牛の装具を燃やしてその肉を煮、人々に振る舞って食べさせた。それから彼は立ってエリヤに従い、彼に仕えた。

波線部の「自分の外套を彼に投げかけた」は、ちょうど「衣鉢を継ぐ」と同じように、「師の後継者として立てる」ということを表す象徴行為である。とすると、傍線部の「わたしがあなたに何をしたいのか」は奇妙な表現。そこで次のような解釈がある。

①波線部は召命物語としての性格を強調するために後から加えられたのであり、もともと

はエリヤに付き従いたいと思ったエリシャの強い思いを描く物語であった。
破線部は付加ではなく、最初から存在していた。その場合には、傍線部は「確かに外套を投げかけて招いたけれども、大事なはお前の決断であって、わたしは何もできない」の意味に取る。

どちらの解釈も程度の差はあっても、エリヤの決意に重点が置かれることになる。そこで、古い生活を象徴する「牛の装具」を燃やすことよって、新たな生き方への決意が表明される。エリヤは人間に過ぎないから、エリヤの決断が語られるのだろうか。

しかし、アモスの召命はエリシャとは異なっている。アモスの7章10―17節である。

10 そして遣わした ベテルの祭司アマツヤは イスラエルの王ヤロブアムに 言うために

「あなたに 謀反を企てる アモスが イスラエルの家の真ん中で

できない この地は 許容することが 彼のすべての言葉を

11 なげなら このように 言う アモスは

『剣で 死ぬだろう ヤロブアムは。』

そして イスラエルは 必ず捕囚に行く この地から。』

12 そして言った アマツヤは アモスに

「先見者よ、 さあ、 逃げなさい あなたののために ユダの地に

そして食べなさい パンを そこで

そしてそこで 預言すべきだ。

13 そしてベテルで 重ねるべきではない 再び 預言することを

なぜなら 王の聖域 これは

そして王国の家 これは』

14 そして答えた アモスは そして言った アマツヤに

「ない 預言者で 私は

ない 預言者の息子で 私は

そうではなく 探す者 私は、そしていちじく桑を 集める者

15 そして私を取った 主が 群の後ろから

そして私に 言った 主が

『さあ、預言しなさい イスラエルの民に』

16 そして今、聞きなさい 主の言葉を……

「先見者(ホーゼー)」と「預言者(ナービー)」。この呼称がそれぞれ何を指しているかは明確ではない。サム上九9「昔、イスラエルでは神託を求めに行くとき、先見者のところへ行くと言った。今日の預言者を昔は先見者と呼んでいた」によれば、先見者と預言者が同義の時代であったことがうかがえる。イザ三〇10「彼らは先見者に向かって、「見るな」と言い／預言者に向かって「真実を我々に預言するな。滑らかな言葉を語り、惑わすことを預言せよ」によれば、同義的にも思えるし、意味の上でずれがあることも考えられる。その場合には、ホーゼーが動詞「ハザー」(幻なで)によって見ることからの名詞形であることを考慮すると、ホーゼーに特徴的なことは幻であり、ナービーに特徴的なことは語りなのかもしれない。しかし、「ナービー」も「恍惚状態に陥る」を意味する動詞から派生しているから、違った解釈も可能(関根正雄「イスラエルの思想家」122ページ以下を参照)。アマツヤがアモスを「ホーゼー」と呼んだ理由についての解釈。

④ 召命の記事を幻の記事の間に挿入するための編集上の配慮。

⑤ アモスをホーゼーと呼ぶことよって軽蔑心を表した。

⑥ カリスマ的な指導者として是認した。

いずれにしても、アモスの召命はマタイ・マルコのように、神(イエス)の選びが強調されている。